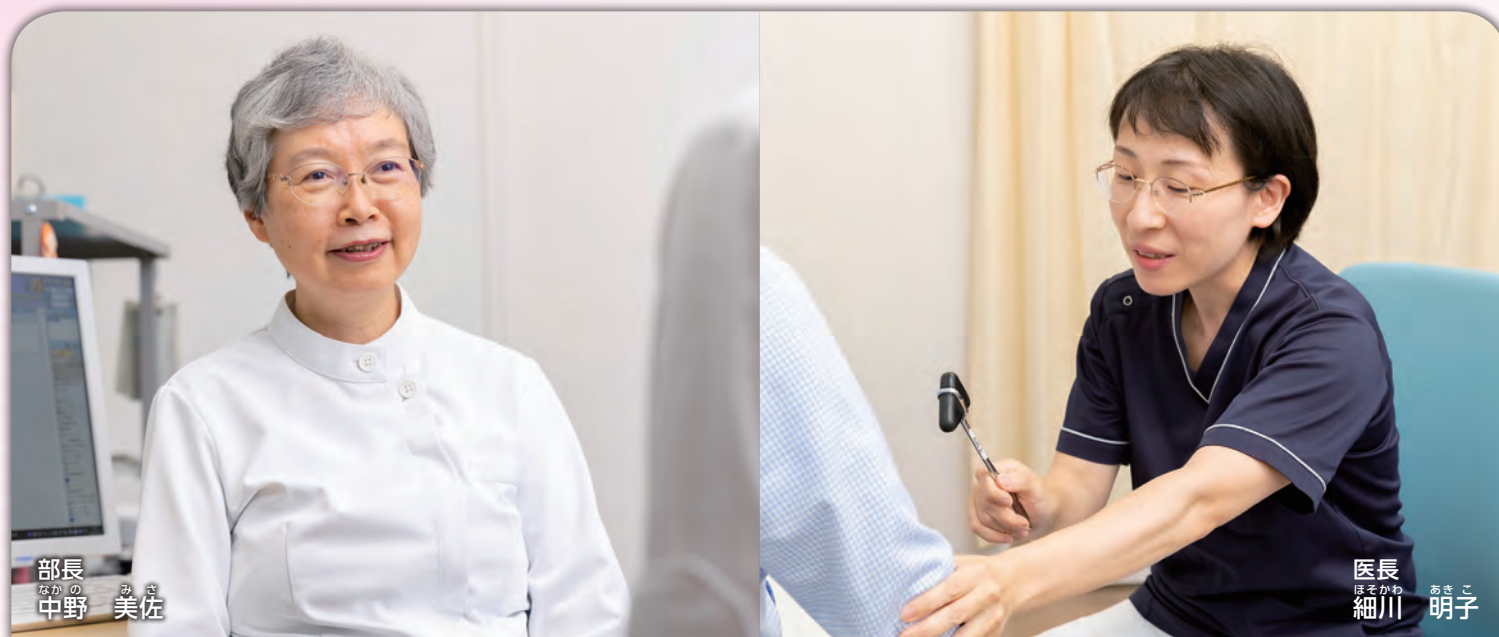


ともに

VOL. 14

2023年
秋号

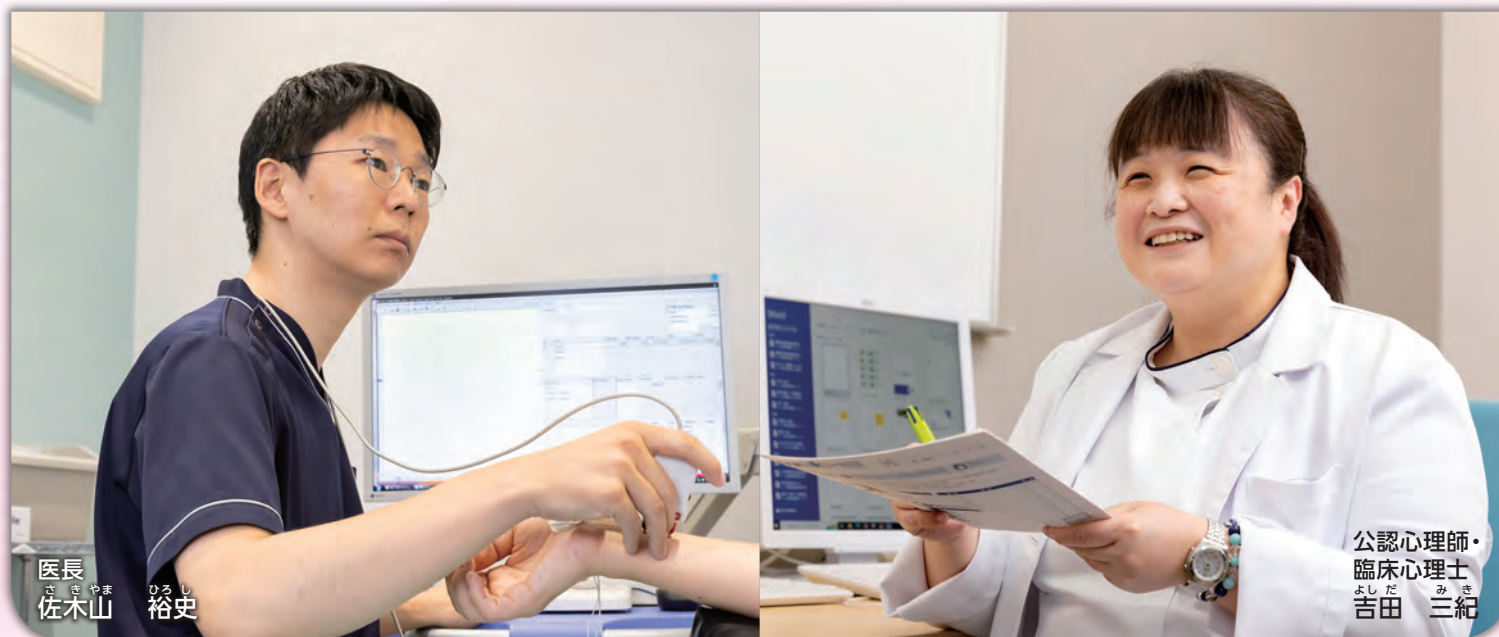


部長
なかの
中野 美佐

医長
ほそがわ
細川 明子

脳神経内科ってどんな診療科？

多くの患者さんの診療に当たる脳神経内科の精鋭メンバー



医長
さきやま
佐木山 裕史

公認心理師・
臨床心理士
よしだ
吉田 三紀

市民とともに心ある医療を

地方独立行政法人 市立吹田市民病院は「市民とともに心ある医療を」の基本理念に基づき、急性期医療や高度医療、救急医療を中心に、吹田市の中核病院として、質の高い安全な医療の提供に努めています。それらの取り組みを、広報誌「ともに」を通じて市民の皆さんにお伝えいたします。

— 患者さんをさまざまな側面からサポート —

公認心理師・臨床心理士の業務について

阪神・淡路大震災以降、心のケアの重要性が広く認識されるようになってきました。その心のケアなどを行うのが公認心理師や臨床心理士です。その主な仕事内容は大きく分けて、次の3点です。

- ① どのようにしたらより自分自身が楽に過ごしているか、これから身につける工夫や対策は何かを客観的・間接的な方法で測定して自分自身を知り、得られた数値や情報から治療者側も理解するための「心理検査」
- ② 専門知識・技法によって気づいてもらえるように促す専門家との対話によって、悩みや困りごとなど問題解決に向けたアプローチを行う「心理カウンセリング」
- ③ 心の健康に関する知識を正しく知ってもらい、メンタルヘルスの不調を予防するための「啓蒙活動」



公認心理師・臨床心理士
よしだ
吉田 三紀

職員はメンタルヘルス・ケア活動にも力を入れて取り組んでいます。新型コロナウイルス感染症が拡がり始めた2020年からは、特に新型コロナウイルス感染症で働く職員たちのメンタルヘルス・ケアにも力を入れて取り組みました。その結果、精神的疲弊によって心の不調に陥り休職や退職していく医療職員の増加が指摘される中、当院の職員は心の健康を保ち続けることができ、何と心乗り越えてきました。

心のケアを受けるということは、自分の心と対話をする時間であり、専門家は「自分らしく生きる」ことを支えるお手伝いをします。例えば、外傷や病気による痛みや苦しみ、介護をされているご家族の方のストレスや哀しみ、これまでの人生とこれから的人生について、老いや死についてなど、誰しも的人生に起こり得るさまざまな出来事を機に、自分の心と対話してみよう。ぜひ、お越しください。



心理カウンセリング案内は
こちら↓

チーム医療を支えるスタッフ紹介



神経難病他、何らかの障がいのある患者さんの持つ力を最大限に引き出して生かすよう丁寧な看護を提供します。

4階西病棟
看護部長 谷口 直美



髄膜炎、てんかんなど突然の神経疾患の発症で受診される方の不安が和らぐようお話を傾聴します。

外 来
副看護部長 平尾 郁子



退院後にその人らしい生活がスムーズに送れるよう、多職種と連携しながら提案しています。

患者支援センター
主任 恒岡 雅美



注射含め特殊な薬剤もあり、副作用のモニタリングや適正に使用できるよう情報提供しています。

薬剤部
主任 駒居 真紀子



脳波検査は脳から出る電気信号を頭皮上に電極を付けて記録します。痛みは伴わない検査です。

臨床検査部スタッフ



日常生活の練習、環境設定等を実施。認知症の方でも安心いただけるよう心がけています。

リハビリテーション科
技師長 常深 志子

※院内において、マスク着用を徹底していますが、集合写真、人物紹介の写真は感染対策をしっかりとった上でマスクを外して撮影をしています。

脳神経内科とは、脳や脊髄から末梢へつながる神経、そのまわりの筋肉の病気を診る内科です

脳神経内科は、従来「神経内科」といわれていましたが、「精神・神経科」と間違える患者さんも多いことから、最近は「脳神経内科」と呼ぶようになりました。しかし、今も「どんな病気や症状に対応するのか」「どんな診療を行うのか」など、はっきりとは分からないという人もいるのではないのでしょうか。今号では「脳神経内科」を詳しく紹介します。

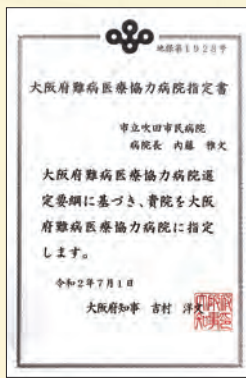
脳神経内科が扱う疾患



脳神経内科
部長・中野 美佐

「脳神経内科」で診る病気の症状としては、しびれ、手足の脱力、歩きにくい、ふらつく、つっぱる、けいれん、しゃべりにくい、ものが二重に見える、頭痛、かたてに手足や体が動いてしまう、ものわすれ、意識障害などがあげられます。病名としては、てんかん、脳炎、髄膜炎、ギランバレー症候群など神経内科救急疾患、神経難病、末梢神経障害、認知症など幅広く対応しています。当院は、大阪府より、てんかん専門地域連携施設、

難病医療協力病院に認定されています。さらに難病の患者さんが職場で難病を正しく理解してもらい、安心して働けるよう当院に通院されている難病患者さんの就労支援を大阪府の難病就労支援の専門職や吹田保健所の難病チームと連携をとりサポートを行っています。「この症状、なんの病気からきているんだろう？」と、受診する診療科に迷ったら、全身を診ることができ「脳神経内科」を受診してください。



脳神経内科 (神経内科)
脳、脊髄、神経、筋肉の病気

精神科、精神神経科、神経科、心療内科
こころの病気
(うつ病、パニック障害など)

脳神経外科

手術が必要な
脳や神経の病気
のうしゅよう のうどうみゃくりゅう
(脳腫瘍、脳動脈瘤など)

脳神経内科の診療について

外来診療をスムーズに行うために脳神経内科は完全予約制となっています。受診される際は、必ず医療機関からの紹介状(診療情報提供書)をご用意いただいた上で診療の予約をしてください。

高齢者とてんかん

てんかん患者数は日本全体で約100万人といわれています。近年新薬が多数登場し、発作の寛解率(発作が落ち着いて安定した状態になる確率)は約70%と高くなっています。より早期に適切な薬剤に出会うことが大事です。

てんかん発作は左右対称性に手足のけいれんなどの症状が起こる「全般発作」と、脳の局所に発作焦点がある「焦点発作」に分けられ、成人てんかんの大部分は焦点てんかんです。

人口の高齢化とともに高齢者てんかんが急増しています。高齢者てんかんは、目の焦点が合わず「ぼー」としている意識減損発作、無目的な動作を繰り返す自動症発作など、一見てんかんと分かりにくいことがあります。

WHO のてんかんの定義 (1973 年)

「種々の成因によってもたらされる慢性的脳疾患であって、大脳ニューロンの過剰な発射から由来する反復性の発作(てんかん発作)を主徴とし、それに変異に富んだ臨床ならびに検査所見の表出が伴う。」つまり

- 1 さまざまな原因によって起こります。
- 2 長い年月の治療が必要です。
- 3 脳波の異常が関連しています。
- 4 繰り返す発作が主な症状です。
- 5 患者さんによってさまざまな発作症状がありますが、一人の患者さんの発作の型は決まっています。
- 6 検査の結果もさまざまです。

脳波に関連した発作であり、誰でもかかりうる病態です。

このような症状があったら、すみやかに受診しましょう



● 体がふるえたり、
転びやすくなった
↓ パーキンソン病



● 呼びかけても
返事がない
↓ てんかんの意識減損発作



● けいれんを伴う
発作が起きた
↓ てんかんの強直間代発作

関連する臨床検査

脳波検査

脳が絶えず発している微弱な電気信号を頭皮上に電極を付けて記録します。電極はクリーム状の糊で装着し、痛みはありません。睡眠時に異常波が出やすいので、寝不足で来ていただくようお願いしています。



脳波検査室の風景



脳波などを表示するモニター

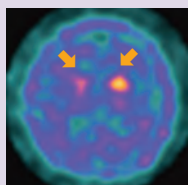
DAT 検査

脳内の黒質線条体ドパミントランスポーター(※1)を画像化する検査でドパミン神経の変性、脱落を評価できます。パーキンソン病やレビー小体型認知症(※3)の診断に役立ちます。写真の上がパーキンソン病の方の画像で、下は正常例です。DAT 検査は国立循環器病研究センターに依頼しています。

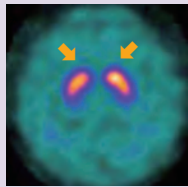
※1 黒質線条体ドパミントランスポーター：脳内に放出されたドパミン(※2)を再取り込みする役割があります。

※2 ドパミン：意欲や学習、運動調整などに関わる脳内ホルモンです。

※3 レビー小体型認知症：レビー小体と呼ばれる異常なたんぱく質が神経細胞に蓄積する病気で幻視や認知の変動、睡眠中の異常行動、パーキンソン病症状などを特徴とする認知症です。



パーキンソン病の例
(→)の部分が正常な例
と比べ小さくなります。



正常な例



MRI